双葉通信【第 102 回】　“ふくしまに恋をして”　20200615

上　田　　勉

日本政府は専門家会議の議事録を作成しようとない。今の出来事を記録しないで、過去の歴史を顧みない者は同じ過ちを起こすことになる。

中国武漢の封鎖の中で、日記を書き続けた女性がいた。その人の名は“方方さん”

「方方さんは、社会の底辺に生きる人々を主題にした小説を発表してきた著名な女性作家だ。武漢封鎖から 2 日後の 1 月 25 日から 3 月 24 日までの日々を毎日 SNS に投稿した日記は全 60 編からなり、「武漢日記」とも呼ばれた。前例のない都市封鎖の中で何が起きているのか。日記には、政府発表や国営メディアが伝えない市民の不安や悲しみがつづられ、国内外から注目を集めた。《私が関心を持ち記したかったのは、感染が広がる街で生きる一人一人の暮らしや気持ちだった。一市民の視線からこのパンデミックを観察し理解したかった。》方方さんはこう振り返る。　連日政府が発表する死者数と感染者数がニュースになる中で、日記は数字の背後にある失われた日常の姿を伝え続けた。《感染拡大の初期、武漢の医療体制は崩壊し本当に多くの人が死んだ。私は武漢に 60 年以上暮らしてきたから、亡くなった人の中には親しい人もいた。》母親の遺体を乗せた霊柩（れいきゅう）車を追いかける少女の姿、身近な人の死と近づくウイルスへの恐怖、市民に「感謝」を求める当局への疑問……。日記には自身が目にした光景や抱えた思いに加え、当局の責任を追及したりすることも多く、日増しに注目が高まった。

多くの読者を引きつけた理由を、方方さんはこう受け止める。《封鎖された武漢の中で何が起きているのか。それだけ多くの人が知りたかったということだろう。》

■方方さんの「武漢日記」の一部

＜2 月 2 日＞　今日一番つらかったのは、霊柩（れいきゅう）車を大声で泣きながら追いかける女の子の姿だった。母親が亡くなったのに、見送ることもできない。

＜2 月 5 日＞　私が日常の小さなできごとを記録するのは、死者や感染者だけが今回の人災の被害者ではなく全ての人々が代償を払っていると伝えたいからだ。

＜2 月 24 日＞　一つの国が文明国家であるかどうかの尺度は、高層ビルや車の多さや、強大な武器や軍隊や、科学技術の発達や、世界各地で豪遊する旅行客の数ではない。唯一の尺度は、弱者にどう接するか、その態度だ。

＜3 月 10 日＞　勝利はない、あるのは終息だけだ。武漢の感染がここまで蔓延（まんえん）したのには多くの原因がある。湖北省や武漢市の役人、衛生健康委員会、専門家ら、みな責任は重大だ。彼らに責任がある以上、批判するのは当然だ。

＜3 月 24 日（最終回）＞　日記に寄せられる投稿を読む度、こんなにたくさんの人が私と同じ考えを持っているのだと思えた。だから孤独を感じることはなかった。

「武漢日記」中国内で猛批判　国外で出版決まり愛国の圧力　作家・方方さん「不可解」

新型コロナをめぐり米中の対立が激しさを増す中、「売名と米国の利益のために中国をおとしめている」「売国奴」など、攻撃的な投稿が相次ぐようになった。それでも方

方さんは、出版をやめるつもりはない。外国の読者が読む機会を失いたくないからだ。
　日記は日本での出版も予定されている。《亡くなった人たちの悲しみを、日本の読者にも知ってもらいたい。》」（「朝日新聞」20 年 6 月 10 日付け）

武漢封鎖の日々を日記につづった作家・方方さん＝方方さんのブログから

都市封鎖中の武漢市内では住民の外出も制限され、野菜や肉がボランティアらによって配達されていた＝３月１６日、武漢市民提供